

## 広島・長崎との対話

● 山 崎 一 穎

毎年8月になると日本列島は、鎮魂の日々を迎える。昭和20年(1945)8月6日に広島へ、9日に長崎へ原子爆弾が投下され、15日終戦を迎えた。この戦争で310万人余の日本人の生命が失われた。

私が広島、長崎に向き合う切っ掛けは、昭和30年(1955)の高校2年生の時であった。永井隆博士(長崎医大教授)の『この子を残して』(昭24・4、講談社)というエッセイを読んだ事に始まる。長崎の原爆で奥さんを失い、自身も被爆し、迫り来る死の床で孤児になる運命の幼い子(誠一、カヤノ)に心を残しながら綴った病床記録である。カソリック信者であった博士にとって、祈り以外なかった。

永井隆博士が被爆状況、被爆患者の診察・治療を記録した『長崎の鐘』(昭24・1、日比谷出版)は、松竹で映画化された。映画の主題歌「長崎の鐘」(作詞サトウハチロー、作曲古関裕而、歌手藤山一郎)は、全国に流行した。唄は「こよなく晴れた青空を／悲しと思うせつなさよ」に始まり、二番の

召されて妻は天国へ  
別れてひとり旅立ちぬ  
かたみに残るロザリオの  
鎖に白きわが涙

と哀切な中にも神に召されていく鎮魂の歌である。体験的に言えば、ラジオから流れる唄を聴いて、永井博士の本に出会ったのである。

広島と向き合ったのは大学時代であった。原民喜の『夏の花』(昭24・

2、能楽書林)の衝撃は大きかった。原民喜は奥さんを亡くし、終戦の年の1月、広島の兄のもとに疎開する。8月6日朝、家の中で被爆する。

小説は主人公の〈私〉が8月15日の妻の新盆のために、この日(8月4日)繰り上げ墓参をする。それは新盆まで広島が持ちこたえられないのではないかという不安と恐れがあったからである。「夏の花」らしい黄色の、可憐さに野趣を帯びた花束と線香とを墓前に供える所から始まる。

劫火に追われて川へ向かって逃げる。多くの死者や死に行く者に出会う。苦しむ者、死に行く者に対して〈私〉は優しい。

私は殆ど目抜の焼跡を一覧することが出来た。ギラギラと炎天の下に横わっている銀色の虚無のひろがりの中に、路があり、川があり、橋があった。そして、赤むけの膨れ上った屍体がところどころに配置されていた。これは精密巧緻な方法で実現された新地獄に違いなく、ここではすべて人間的なものは抹殺され、たとえば屍体の表情にしたところで、何か模型的な機械的なものに置換えられているのであった。苦悶の一瞬足搔いて硬直したらしい肢体は一種の妖しいリズムを含んでいる。電線の乱れ落ちた線や、おびただしい破片で、虚無の中に痙攣的の凶案が感じられる。

「精密巧緻」こそ、近代科学が生み出した原子爆弾にほかならない。その投下によってすべてが「模型的な機械的」なものに変容する。風景の中にヒト、モノが無機的に固定化する。人間的なものは非人間化し、非日常は日常化する。ここには人間的な感情や表情はない。作者の怒りと哀しみが静かに語られている。『夏の花』の表現の凄さがここにある。

創作集『夏の花』には「壊滅の序曲」「夏の花」「廢墟」の三部作が収録されている。「壊滅の序曲」の文末は「今は誰も鶏の啼声に耳を傾けているものもなかった。暑いひざし陽光が、百日紅の上の、静かな空に漲っていた。……原子爆弾がこの街を訪れるまでには、まだ四十時間あまりあった」で終わる。

文末から空白の不気味さ、切断された時間、やがて訪れる理不尽な死の予兆が感じられる見事な表現である。

「廢墟から」に於いても「あの時、元気で私達の側に姿を見せていた人達も、その後敗血症で斃れてゆくし、何かまだ、惨として割りきれない不安が附纏うのであった」と記される。そして文末では「実際、広島では誰かが絶えず、今でも人を捜し出そうとしているのでした」と結ばれる。

被爆による身体的不安と身内や知人を捜し続ける徒勞が語られる。強制された理不尽の死から辛うじて免れた人も、不安が高じて狂気に追いやられ死へ招き寄せられていく。原民喜の自死もそのような道を歩んだものではなかったか。

次に衝撃的な書物に出会ったのは、昭和41年（1966）10月である。発売と同時に購入した井伏鱒二の『黒い雨』（昭41・10、新潮社）である。被爆体験のない井伏は、重松静馬の「被爆日記」や岩竹博の「被爆の記」等の資料を読み込む。そして事実の記録を小説という表現形式に変える。

小説は被爆した閑馬重松が姪の縁談を進めるが、姪が原爆症ではないかとの噂のため上手く行かない。重松は姪の潔白を証明するために姪の日記を清書する。姪が〈黒い雨〉に濡れた事を記述するに至って、不安を抱く。姪の日記の附録として、重松は自分の「被爆日記」の清書を思い立つ。重松夫妻と同居していた姪の3人は被爆直後傾いた自宅を捨て、阿鼻叫喚の地獄図の様な市街を彷徨し、奇跡的に生き延びる。

小説は8月6日の原爆投下の日から15日の終戦の日までの「被爆日記」を中心に、「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」や戦時下の食生活の記録、聞き書き、貼紙、落書きが嵌め込まれ、被爆の実態の客観性の保証となっている。記録の多面性と重層化という井伏の手法が〈記録〉を〈小説〉に転化する。

作者の目は冷静に様々な死の瞬間を捉える。1例を次に挙げる。

頭から流れる血が、顔から肩へ、背中へ、胸から腹へ伝わって、

どす黒い血痕をつけている者は数知れぬ。まだ出血している者もあるが、どうする気力もないらしい。(中略)

顔じゅう血だらけにした裸の赤児を、後向きにして負い紐で負って、殆ど裸体で歩いて行く若い女。

ここには終末の地獄絵図が映し出されている。

昭和45年(1970)7月、大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』(1970年7月、第14刷、岩波新書)を読んだ。この本の扉、目次、各章の初めに挿入されたカットに衝撃を受けた。目次の最後に「挿絵カット 丸木位里／赤松俊子『ピカドン』(1950・8・6、ポツダム書店発行)より」と記されている。のちに丸木位里、俊夫妻が描き続けて来た〈原爆の図〉が美術館の壁を覆い尽している「原爆の図丸木美術館」(埼玉県東松山市)を訪れることになる。

『ヒロシマ・ノート』の第1章のカット「爆心地」には、「足だけ二本、ぴったりとコンクリートの路の上にはりついて、つつ立っていました」とコメントが付いて、その様な絵が画かれている。当時本文を読む前にこのカットを暫く眺めていた記憶がある。

『ヒロシマ・ノート』の「プロローグ 広島へ……」で大江は、「最初の息子が瀕死の状態でガラス箱のなかに横たわったまま回復のみこみはまったくたたない」状況にあった時、初めて広島へ入ったと記している。そして第9回原水爆禁止大会が開かれるか否かに当面し、開催されれば分裂大会になった。大江は「じつににがい困難の感覚にみちた大会」(圈点原文のまま)であり、「暗く索漠たる気分」であったと言う。

大江の視線は「ひろしまの河」を発行する婦人たち、原水爆被災白書のプランをおしすすめる人たち、重藤文夫原爆病院長をはじめとする医師たちに向けられる。広島と正面から向き合い逃げない人たちである。大江は「屈服しない人々」と評言し、そこに「人間の威厳」を見ている。

大江の感情や思想は首肯できる。ただ気に掛るのは、「プロローグ」の中で大江は下記のように述べている。

この春、僕は沖縄へ旅行した。沖縄の人々はみな穏和な微笑をたたえて、われわれ本土からの旅行者をむかえたが、誰ひとり、どのような自制心を発動してもなお、その微笑はたちまちこおりつき、穏和な表情の底から不信と拒否の感情のこみあげてくることを禁じえないでいる、そのような婦人に僕は会った。(圏点山崎)

ここに記された「不信と拒否」に会うことで、やがて『沖縄ノート』が執筆される。大江の広島への視点は抵抗感がない。沖縄では何度も跳ね返えされる。対象に対する抵抗感や葛藤があり、それを克服して始めて相手が心を開く。広島へ関わる大江には抵抗感がない。このことが気に掛る。

私が広島を訪れたのは、昭和48年(1973)10月下旬である。この時広島大学で近代日本文学会秋季大会があり、その折原爆ドームや原爆資料館を訪れた。

広島に投下された原子爆弾「リトルボーイ」はウラン235を使用して作られ、広島上空約600メートルで爆発した。その1秒後に直径280メートルの火の球となったと言う。地表の温度は4000度、約14万人の命を奪った。

資料館に入ると劫火に逃げ惑う人々の叫びから耳を覆い、目を塞ぎたくなるような光景が、〈モノ〉化して展示されている。吐き気を催しながらも、確りと見て置かなければと思いつつ展示会場を見て廻った。

この広島行きで大田洋子という作家を知った。自らの被爆体験を『屍の街』(昭25・5、冬芽書房)[注1]に結晶させた。この時『屍の街』(初版、改訂版とも)、『人間檻樓』(昭26・8、河出書房)、『夕風の街と人と』(昭30・10、講談社ミリオン・ブックス)の4冊を古書店で購入した。のちに『半人間』(昭29・5、大日本雄弁会講談社)を購入した。

『屍の街』は、8月6日の広島の惨状を余す所なく伝えている。『人間檻樓』は複数の人々の被爆体験を綴っており、『夕風の街と人と』は戦後復興から取り残された被爆者の実態を克明に描いている。『半人間』

は原爆の後遺症によって狂気寸前にまで追詰められた主人公の心象風景が、幻聴、幻想、幻臭というキーワードで語られる。

大田洋子は『屍の街』で「原子爆弾をわれわれの頭上に落したのは、アメリカであると同時に、日本の軍閥政治そのものによって落されたのだ」と語っている。小説の中心は、被爆の瞬間から河原へ避難して野宿する三日間、そして田舎へ逃がれて行くまでの見聞を通して、惨劇の実態が生ま生ましく描き出される。次に一節を引く。

顔はぼつてりと重々しくふくれ、眼は腫れつぶれて、眼のふちは淡紅色にはせていた。どの人もみな、蟹がハサミのついた両手を前に曲げているあの形に、ぶくぶくにふくれた両手を前に曲げ空に浮かせている。そしてその両腕から襤褸切れのように灰色の皮膚が垂れさがっているのだ。

広島中央公園の大田洋子「屍の街」文学碑は、小説の冒頭の「鬼哭啾啾の秋」の2から引用され、石碑に彫られている。「少女たちは、天に焼かれる、天に焼かれる、と歌のやうに叫びながら歩いて行つた」と。

1960年代、70年代は原水爆反対運動が盛んで、それは広島が常に中心であった。毎年8月になると、マスコミは〈怒りの広島〉、〈祈りの長崎〉を強調する。私など単純に広島から文学が生まれ、長崎から生まれなのはなぜか、という疑問を抱いて来た。長崎の原爆は浦上地区へ投下された。そこには浦上天主堂がある。神に召されたと祈る以外にないことは理解できる。惨劇は記憶に止めると同時に記憶を消去する。

さらに『黒い雨』に見られる様に被爆した人は、「原爆症」という言われなき差別に悩まされる。それはかつて「結核」という病いが、〈遺伝〉であると言われ悲劇【注2】が生じた様に、「原爆症」も子供への影響が種々言われもした。被爆者は沈黙する以外なくなる。

昭和49年（1974）広島から平和への願いを込めた歌という依頼がコロムビアレコードに寄せられた。製作デレクター森啓<sup>あきら</sup>が、作詞を脚本家の松山善三に、作曲を佐藤勝に依頼した。それが「一本のエンピツ」で

美空ひばりが唄った。歌詞の中に「一本のエンピツがあれば、戦争はいやだと書く／一本のエンピツがあれば、8月6日の朝と書く。／一本のエンピツがあれば、人間の命と私は書く」というフレーズがあったと記憶している。

長崎で被爆した林京子の『祭りの場』（昭50・8、講談社）を読んだのは、発売されて数年たったと思う。

小説は当時14歳の女子学生であった語り手の〈私〉が、学徒動員されていた三菱兵器大橋工場に勤務中に被爆した体験を、友人・先生・家族・親類の人々の状況を客観的資料を導入しつつ語っていく。『祭りの場』の「場」は工場の中の広場のことで、男子学生たちが「出陣学徒」を戦地に送る送別の踊りの場であった。8月9日もここに40名の学生がいたと言う。全員即死であった。

九州小倉へ投下されるはずであった原爆は天候の具合で長崎に投下された。長崎へ投下された原子爆弾は「ファットマン」と言って、プルトニウム239を使用している。核物質を爆発させる効率は、広島型より高いと言う。広島も小倉も軍都である。長崎は三菱の兵器工場があり、三菱造船所では戦艦武蔵をはじめ軍艦が造られていた。8月9日11時2分、490メートル上空で白い落下傘に吊るした原子爆弾は爆発した。7万4千人が即死、ほぼ同数の人々が被爆している。

小説の末尾は「昭和20年10月、1月おくれの第2学期である。始業式は追悼会から始まった」で始まる。そして次の記述で終る。

追悼会に列席した生徒の幾人か、その後死亡した。結婚し子供を生み、ある朝突然原爆症で死んだ友人もいる。私は時々追悼歌を口ずさむ。学徒らの青春の追悼歌である。

春の花 秋の紅葉年ごとに またも匂うべし。 みまかりし人は  
いずこ 呼べど呼べど 再びかえらず。 あわれあわれ  
我が師よ わが友 聞けよ今日のみまつり。



し、三浦半島の観音札所巡りを思い立つ。カナの「江戸小歌」の名取りの名が入った日本手拭に御朱印を戴くことを思いつく。

小説は次の様な表現になっている。

思いついた遍路の旅は、松山町から出発した人生の、しめくくりでもあった。山の裾野にひしめく、被爆死した14、5歳のクラスメートたち。峠へ向かう道のそこ、ここには、途中で斃れた香子やミエたちがいる。そして行方も名前も知らない一人の娼婦。この人たちがみんなを誘って、寺寺を巡るのだ。先頭には勿論カナがいる。

この小説は『祭の場』の文末から繋がって来る。勿論、そこにあの8月9日を出発点とした50余年の人生がある。8月9日という「共通の根」を持ち、いつ原爆症で死ぬかも知れぬ不安と恐怖から逃がれたと思った時、老いという問題に直面する。少なくともあの被爆体験がその後の人生を狭めたことは確かであろう。そうであるならば〈私〉の半生とは、一体何であったのかを問わざるを得ない。〈私〉は今では亡きクラスメートとの対話を横糸で織り成す様に進めながら、縦糸に放射線による「死の許容量」、永井隆博士の報告書、医師の話という記録、あるいは事実等を記述していく。記録や事実が小説のリアリティを保証している。

林京子はアメリカが1945年7月16日、世界最初の原子爆弾のトリニティ実験を行ったニューメキシコ州ソコロの南東48kmにある実験場に出かけた。それが『トリニティからトリニティへ』として発表される。

林京子は次の様に記述している。

もの言わぬ大地に立ったとき私は、大地の痛みに震えた。今日まで生きてきた日日も、身心に刺さる非情な痛みだった。しかしそれは、9日から派生した表皮の痛みだったのかもしれない。私は、自分が被爆者であることを忘れていたが、沈黙を続ける大地のなかに、年月をかけて心の奥に沈めてきた逃げた日の光景を、みていたのだろう。決定的な日の私を。

林京子はグランド・ゼロ（爆発点）について「虫の音もない」静まっ

た荒野は自然でありながら、これほど不自然に硬直した自然はなかった」と言い、「生命を生む大地が病んでいる——。私は、被爆者の先輩が母なる大地であったことを知った」と記す。

今や林京子にとって自己の被爆体験が、生命を育む大地の哀しみまで普遍化されて来ている。人間と自然とを一体として捉えている。自己の体験が経験まで拡張して来ている。

広島、長崎の原爆で死んだ人、被爆した人たちは、すべてが〈怒り〉、鎮魂の〈祈り〉を繰り返して来た。それが〈怒り〉の広島、〈祈り〉の長崎とテレビや新聞が報道し、私達もいつの間にか二分して考え、等質に捉える視点を欠いて来た。

私は広島、長崎を一元的に〈怒り〉と〈祈り〉として捉え、その交点に峠三吉の『原爆詩集』の「序」を考えている。峠三吉（1917～1953）も広島で被爆している。峠三吉の詩碑は、広島市の平和記念館の北、原爆慰霊碑の東南の林の中につる薔薇に囲まれて建っている。次に引用する。

ちちをかえせ ははをかえせ  
としよりをかえせ  
こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる  
にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり  
くずれぬへいわを  
へいわをかえせ

この詩碑の裏面には、大原三八雄の英訳が彫られている。

原爆投下の広島に焦点を当てた小田実の『HIROSHIMA』、竹西寛子『管絃祭』、長崎に焦点を絞った井上光晴『地の群れ』、佐多稲子『樹影』など多くの作品が残されている。最後に唐木順三の『「科学者の社会

的責任」についての覚え書』(昭55・7、筑摩書房)に言及する。唐木順三の遺稿(未完)である。私は出版と同時に購入、読了した。

1955年の「ラッセル・アインシュタイン宣言」は、当代の物理学また技術が生み出した原水爆が投下されれば、「人類を含めたあらゆる生物を死滅にいたらしめるといふ危機」の中でなされた。この宣言に署名した8日後にアインシュタインは死去した。アインシュタインは「今度生れ変わったら、科学者にならないで、行商人か鉛管工になりたい」と言ったことを唐木は重く見ている。アインシュタインは、ナチス・ドイツを嫌悪し、ルーズベルト大統領に原子力開発を進言し、原爆の道を開いた。アインシュタインの「行商人か鉛管工になりたい」と言う心の奥にある「科学の原罪」「科学者の良心」を唐木は指摘し、評価する。

「ラッセル・アインシュタイン宣言」から2年後の1957年7月カナダで開催された「パグウォッシュ会議」に参加した科学者の発言に注目する。日本から湯川秀樹・朝永振一郎、小川岩雄の3名が参加している。

唐木は「科学者たちは(中略)科学と技術の非可逆性をいい、科学的精神の自由をいひながら、平和と福祉を念願し、社会的責任をみづからに課」す程度では、不徹底、不誠実な二元論で「世界観としての統一」がないと厳しく追求する。科学者の真理追求の偏重した熱心さが「原水爆」を生み出し、科学技術の限らない進歩を前提とする現代文明を絶対とする科学たちを指弾する。唐木は科学者の「原罪意識」こそ危機を救う道であると言う。日本人の科学者の中では、朝永振一郎【注3】を評価している。唐木は未完の文末を次の様に記す。

この「絶対悪」と物理学の進歩、未発見な未発明のことがらを見出す折の喜悦とは、どこでどうつながりうるだらうか。湯川の場合、つながつてゐない。つまりは「懺悔」がない。懺悔が出てくる基礎、基底がなく、自己懺悔、自己告発が無い。無いと言ひきれないとなれば稀薄である。

右の点が、遠くはアインシュタイン、近くは朝永振一郎と違ふところ、一言に縮めれば「罪」の自己意識の問題である。

唐木の「〈罪〉の自己意識」という評言こそ、普遍的命題として受け止めておく必要がある。身近な問題としては、船とともに海に沈み行く修学旅行の生徒にカメラを向けシャッターを切った行為に対して〈報道か、人命か〉で話題【注4】となったことがある。この種の問題は枚挙にいとまがない。しかし、人間の生き方の問題として考えて見なければならぬ。

筆を擱くにあたって、次の事を記して置く。映画、演劇、絵画をめぐるのは、PR雑誌「図書」（第706号、2008年1月1日、岩波書店）掲載の小沢節子『映画のなかの原爆の絵—「私の記憶」が変容するとき』が、示唆に富んでいる。

この史代の漫画『夕風の街 桜の国』（双葉社）を佐々部清監督が映画化した。その映画と日系三世のスティーブン・オカザキ監督によるドキュメンタリー映画「ヒロシマナガサキ（原題 White Light/Black Rain）」を取り上げ、そこに挿入された絵画の意味を考察している。

小沢氏はエッセイのタイトルの「原爆の絵」について、「1974年から翌年にかけて、さらに2002年にと、二度にわたって広島・長崎で募集された体験者の絵」を指していると記している。

劇映画『夕風の街 桜の国』の中に登場する高蔵信子たかくらあきこさんの「燃える手」について語る。片手だけが川の中を流れて行く。その後には川の中を流れる死体と猛火に焼かれて異形の姿となった人たちを描いた絵である。小沢氏は「無残な死体のあふれた川は時の流れ、命の流れの表象ともなり、一人ひとりの記憶は〈共同体〉の物語へと合流」していくと記している。映画の中の絵画はこのように象徴的イメージへと転化される。

ドキュメンタリーの「ヒロシマナガサキ」でも二枚の絵画が使われている。高蔵信子さんの「燃える手」と小川紗賀さがみ己さんの「防火水槽のなかで焼死した人たち」である。

小沢氏は、絵は一見被爆者の語りを補うようにみえながら、「被爆者の語りと絵との関係が逆転する瞬間が訪れる」と書いている。つまり、被爆者が観客に絵を説明しているような錯覚を起こさせるのである。

小沢氏は井上ひさしの戯曲『父と暮らせば』を、黒木和雄監督が映画にした折、丸木位里・俊夫妻の連作絵画「原爆の図」が使われたことも記している。このように絵画の記憶が映画に引き継がれていく。

次に記して置きたいのは、朗読劇のことである。2008年1月30日付「朝日新聞」(13版 34面)は、「原爆劇残す」女優結集／「この子たちの夏」出演18人／主催者解散「灯消せぬ」という見出しを掲げ、次の様に報じている。

演劇制作体「地人会」は、代表の木村光一氏の健康上の理由で解散するので「今後の上演が危ぶまれていた舞台が、長年出演してきた女優たちの手で引き継がれることになった。18人が〈この子たちの夏の会〉を結成、今夏からの公演に取り組む」と報じている。

そして「会を作ったのは川口敦子さん、中村たつさん、日色ともゑさん、柳川慶子さん、渡辺美佐子さんら、ほぼ全員が戦争を知る世代」であると報じられている。代表の高田敏江さんは「二度と戦争を起こしてはいけない、そのことを語り続けていきたい」と語っている。

—2008・1・30—

## 追記

「朝日新聞」(2008年2月3日、13版 35面)掲載の訃報を下記に記す。

筒井茅乃(つつい・かやの)さん

被爆者救護に尽力した故永井隆博士の次女。2日、肝細胞がんで死去、66歳。通夜は4日午後7時、葬儀は5日午前11時30分から大阪府枚方市岡南町3の1のカトリック枚方教会で。喪主は長女和子さん。

長崎で被爆した父の著書『この子を残して』に、自らが亡くなった後を案じる幼子として描かれている。原爆投下時は3歳で、市郊外に

疎開していて直爆を免れた。主婦業の傍ら各地で平和を訴える講演を続けた。著書に『娘よ、ここが長崎です』。

—2008・2・3—

〔注記〕

- 1 『屍の街』の初版は、昭和23年（1948）11月中央公論社から出版された。この初版は、当時のアメリカ占領化では許されない表現を削除している。
- 2 徳富蘆花の『不如帰』（明33・1、民友社）の浪子と武夫の悲劇は、結核に罹った浪子に子供が出来れば川島家を継ぐべき子供は、やはり結核で死亡すると考えた武夫の母によって無理に引き裂かれたことによる。つまり、武夫の母は結核を伝染病と見ず、遺伝と見ている。
- 3 朝永振一郎『物理学とは何だろうか』（上下、岩波新書）
- 4 紫雲丸事件。昭和30年（1955）5月11日早朝、岡山県の宇野と香川県の高松を結んで瀬戸内海を航行していた宇高連絡船の紫雲丸が、貨車航送船第三宇高丸と衝突して沈没した事故である。死者168名。そのうち100名以上が修学旅行の小学生、中学生であった。沈み行く子供らを二人のカメラが捉えた。この〈悲惨な情景を伝えたスクープ写真〉をめぐって、『報道か、人命か』で話題となった。

私は瞬間にシャッターを切ったことは責められないだろうと思う。唐木の言葉を借りれば、その人のその後の人生の中に「〈罪〉の自己意識」が存在するか否かで評価されるであろうと考える。